

7月総評 西躰かずよし

今月も魅力的な作品が多くあった。短さのなかに光る、みなさんの新たな表現を楽しみにしている。

ルリタテハ

入道雲をくいとめて

翠

東京都

「そのまっくらな巨きなものを／おれはどうにも動かせない」と書いたのは宮沢賢治だったろうか。この作品は、ちいさなルリタテハにおおきな入道雲をくいとめるという願いを託さざるを得ない自身の存在を思い起こさせてくれる。

月彦全句集を抱き汗の腋

大橋 弘典

群馬県

月彦は歌人、藤原龍一郎の俳名（藤原月彦）だろう。藤原月彦は俳句において耽美的な世界を創造し、塚本邦雄や馬場俊吉らの世界に通ずるような作品を多く残した（BL俳句の先駆でもある）。「全句集を抱き」でそうした世界への没入と、「汗の腋」で没入による甘美で凄惨な体験が表現される。またこの作品からは藤原の俳句と同質の緊張感を感じることが出来る。藤原月彦の作品を少し挙げておこう。「少年の左眼に映るは椿事ばかり」「弾痕疼く夜々抱きあう亡兄（あに）と亡兄（あに）」

とうもろこしは

はじっこの

雨の味のするところが好き

春町 美月

大阪府

とうもろこしのはじっこが雨の味なら、真ん中はどんな味なのだろう。はじっこは普段あまり気にとめられないものだし、雨の味はむしろ無味無臭であることを想起させる。あえてそれを好きと表現することで、作中の私のやわらかなまなざしやさびしさが読者に伝わる。

娘の名前をひらがなで呼ぶ母 まちりこ 埼玉県

名前を呼ぶ音声には、ひらがなも漢字もないから、実際にはひらがなで呼ぶことはできない。にもかかわらずこの作品が説得力を持つのは、ひらがなのやわらかなイメージと母の声が重なるからだろう。

数学がわからないから降りる駅
降りて歩けばきれいな夕日 豊富 瑞歩 茨城県

作中の私はおそらく目的地に到着するまでに途中下車したのだろう。確かに、ここに描かれる夕日のように、降りることで見つかるものがあるかもしれない。

将来の夢はあめんぼ しりたくて
しまったことなどひとつもないよ 白野 新潟県

将来の夢をあめんぼにしてしまうところや、「しりたくて／しまったことなどひとつもないよ」といってしまうところから、青春の屈折が感じられるが、一見幼い表明ともとれるそのことばが説得力をもつのは、そこに一片の真実が含まれているからだろう。世界は付与されるものでしかないということを思えば、知りたくて知ることなど何一つ無いのかもしれない。

指鉄砲撃って
わずかに
蝶
しずむ 長谷川柊香 宮城県

夢のような静けさが作品を覆う。行替えのあとの平仮名の「わずかに」という言葉と「しずむ」ということばが、その静けさに一役買っている。